黒ボコ

事務局　〒920-0104　金沢市四坊高坂町カ１甲２　徳田方
TEL・FAX　076-257-5157
郵便振替口座　00770-9-3918

１０周年特別企画の白山南竜
今年は面白い

代表　宮下實

４月１日　朝　９時１秒　石川県成人病センターに集まった役員が一斉に携帯電話で申し込みの電話をする。予想通り繋がらないが我々は我慢強い・・何と電話をかけてから１時間１０分後にやっと通じて予約がとれました。
昨年までと違い今回は白山の植生や花が最も楽しめる時期に予約を入れました　しかも自然環境抜群の南竜山荘です。初めて南竜山荘を選んだ訳はここが日本有数の山岳リゾートで皆様にゆったりと過ごして頂けると確信したからです。時間に追われてピークを目指す登山スタイルは我々「赤い靴ひもの会」には似合わない。

他の山岳会とは違う道を私たちは歩んで来ました。それは「がん体験者や仲間と共に人生を愉しむ」ことでは無いでしょうか？体力に自信が無くなって来た会員さんにも今回の企画は自信をもってお薦めします。私と共に木道を歩いて小川の流れに足を浸したいと思いませんか。お待ちしています。

今年もみんなでめざそう　白山！！
８月２日（水）～　３日（木）
参加者・支援者募集

「南竜の風景」

田野尻　明

白山登山でいつも眼下に目にする南竜は静かでのんびりとした空間が広がり、そこで花などを見て穏やかな時間を過ごしたいとの気持ちになります。それともう一つ、嫌でも目に入るのがそこから別山への味気の無い一本の直登の登山道です。のんびりしたい気持ちとは裏腹にどこまで登れるのだろかといつも思うのです。

そういえば自分の病み上がりの時にがつがつした生活態度を改めのんびり過ごそうと思いつつ、自分の体力不安を確かめたい為に何かしたいと始めた登山の時の気持ちと南竜の風景と重なっている様な気がします。

そして以前に南竜から別山への直登の登山道を点となって動いている登山者を見た時に、のんびりも良いが息を切らして登って、あそこから白山を見てみたいと思った事も有りました。

今回の白山登山は山頂を目指す登山と違い、南竜で余裕を持った登山の計画の様ですが、自分はのんびりの方か、汗をかく方かどちらを選ぶか、今からウキウキの思案中です。

（体験者・サポーター）

白　山

小笠原清子（体験者）

もう一度白山に登ってみたい、そんな思いでいた時、新聞にて赤い靴ひもの会のことを知りました。早速電話にて快い返事を頂きました。

五月の雨の日、富山県の「中山」へ連れて行ってもらいました。皆様と初めての対面です。どの方もやさしさと逞しさ、それぞれの個性が光って見えました。

平成７年８月、10年ぶりの白山。気があせって足にけいれんがおき、皆様に大変心配をかけてしまいました。歩き始めて中飯場まではとてもつらい。もう少しで甚之助避難小屋だなあと思いながら、もう歩くの嫌だと、退くに引かれず、やっとの思いで小屋に着く。つかれがどっと出て昼食がすすまない。リーダーの方が大きなおにぎりをくださった。

その後歩き始めると少し体が慣れてきた。南竜分岐点まで来ると半分登ったかなあと思う。黒ボコは以前よりも階段のところがあり登りやすくなっていた。もう少しで室堂だなあと五葉坂を黙々と歩く。おくれぎみの私を隊長さんや皆様が笑顔で迎えて下さり、やっと登れたと感謝いっぱいでした。その後記念写真を撮り、広場で乾杯。

帰りは足元に気をつけながら、時には歌を口ずさむ人もいてたのしい気分になる。

白山市（旧松任市）へ越して来て、日頃から一度白山へ登ってみたいなあと思っていたら、松任商工会議所主催の第１回一般市民白山登山教室の募集があり、無謀にも参加した。その後松任山岳会の人達と行動を共にした。また新聞社の登山教室にも行きました。

赤い靴ひもの会の皆様と行動を共にし、そのやさしさと適切な指導にいつも助けられながら、やっと登れたときのうれしさ、みなさまのあたたかさが胸にしみます。この方々とずっと一緒に登れたらなあと思いました。

励まし合って登った人の中には亡くなられた方もあり、もう姿も見られず、思い出してはさみしい気持ちになります。山へ行くと自然の恵みに行かされている自分を新たに知ることが出来るのです。心がおだやかになるのです。歩けなくなっても皆様に会いたい。これからもよろしくお願い致します。

10周年おめでとうございます。少しでも応援できたらなと思います。ありがとうございます。

故郷の山「日野山」

佐藤　秀紀

２０１７年３月２６日に３月の例会登山として日野山に登った。
日野山は私の故郷福井県の山であり、昔から北陸線の車窓からその特徴ある秀麗な山容をよく眺めていた山でもある。しかし、これまで登ったことがなく今回が初めてであった。
事務局からの依頼もあり事前調査としてまず登り、次いで本番と、二度登った。

事前調査は３月２０日。徳田さん、坂本さん、村田さんと４人参加。山麓の日野神社まで車で行く。日野神社は歴史を感じさせる立派な神社である。正式な登山口はこの神社の横から登るが、我々はタクシーで反対側の萱谷登山口へ向かう（当初予定登山口）。晴れて気持ちの良い日であった。

９：１５登山口発。最初からかなりの急登。尾根に出てしばらく歩くと宮谷コースとの合流地点に出る（１０：２５）。この辺りからところどころ雪が現われ、左手に日野山のピークが眺められる。しばらく歩いて前ピーク辺りで雪がかなり出てきたのでスパッツを付ける。マンサクの花が咲いていた。最後の雪混じりの急登を登りきると広い山頂に出る（１１：４５）。山頂には立派な日野神社の奥ノ院や山小屋がある。晴天ではあるが、遠くの山は霞んではっきりは見えない。遠望が利けば白山、御嶽山から日本海までみえるそうだ。白い山が見えたので白山かと話していると、地元の人が部子（へこ）山だという。辺りはまだ一面の残雪。鳥居が半分くらい埋まっている。小屋の横で太陽を一杯浴びながら昼食。１２：４０日野神社に向けて出発。途中、「比丘尼ころがし」の急所などもあり、雪解け水で道はぐしょぐしょ。さらに旧道や舗装道などがあって道が混乱している。舗装道は奥ノ院改修の折に工事用につけられたそうだ。１３：２０「室堂」に着く。登山途中の休憩所であろうか。谷川の水もあり休憩。あたりには不動尊や古い石地蔵なども置かれ信仰の山をうかがわせる。１４：１５日野神社に至る。萱谷登山口からの登り２時間半、日野神社への下り１時間４０分。萱谷登山口からの登りは会登山ルートとしては厳しいのではないかということで日野神社往復コースをとることとなった。

本番の３月２６日は、日野神社からの往復であったが、体験者Ｏさんについて数人でゆっくり登り、途中の「室堂」まで登って１２時近くになったので、ここで昼食。その後ゆっくりと下った。一度神社まで戻り、その後本隊を迎えに再度途中まで登った。今回はサポート本来の若割を果たせてよかった。

＜日野山＞

日野山(795)は別名「越前富士」とも呼ばれているようだ。開山は越前の僧「泰澄」によって７１８年（養老２年、白山開山の翌年）に行われ、古くから山岳信仰の霊山として扱われてきたという。また、武生には越前国の国府があり、国府の象徴として知られた名山であった。

＜紫式部＞

平安時代（９９６年）国司として赴任した父藤原為時とともにこの地を訪れた紫式部は１年半ほどこの地に滞在している(２３歳の頃)。日野山にちなんだ歌として、

「暦に、初雪降（ふる）と書きつけたる日、目に近き日野岳といふ山の雪、いと深く見やらるれば」という詞書きがあって、

「こゝにかく日野の杉むら埋む雪小塩（をしほ）の松に今日やまがへる」

（この地でこのように日野山の杉木立を埋めるように降っている雪。都の小塩山の松にも今日は雪が降り乱れているのでしょうか）と雪に閉ざされた田舎から京の都を懐かしんでいる。

＜日野神社＞　　日野神社

由緒之碑によると、御嶽山、日永岳（雛が岳）ともいえる日野山に対する山岳信仰の神社であり、山頂に奥宮がある。「日本紀略」に延喜１５年（９１０年）に「越前国日野名神に従５位を授く」とある。中世・近世においては山岳信仰の霊場として知られた。近世では越前藩主松平候、府中領主本多候 の崇敬が篤く、社領・社殿等が寄進されてい る。　　日野山祭りは７月第三土曜日。日野神社で神楽を奉納したのち、山頂に登り大きなかがり火をたいてご来光を迎える。「昔は夜半まで踊り、若者は自分の気に入った相手を見つけ連れ添って登山して、翌朝、山上でご来光を迎える。 真っ暗なので途中藪の中でコチョコチョよくしたもんだ。」との古老の話もある。（サポーター）

＜日野山登山ルート＞

＜紫式部公園からの日野山＞

ある俳句にまつわること

徳田　年英

たんぽぽや　呑気な妻に　助けられ

ＮＨＫ第１のラジオ番組に、毎週土曜日午前十一時五分からの「文芸選評」というのがあります。お聞きの方もあるかと思います。週替わりで聴取者から寄せられた俳句、川柳、短歌をそれぞれの選者が寸評を加えながら紹介していきます。進行役はＮＨＫの男性アナウンサーとアシスタント(?)の女性の二人。ぼくはうちでの仕事のときにはよく聞いています。

昨年４月９日に紹介された入選１５句のうちのひとつが冒頭の俳句です。選者は俳人の鈴木章和氏。この句は「たんぽぽ」、「呑気な妻」、「助けられ」と、いずれも飾りのない身近な言葉を使った、仲の良い円満な夫婦の像が浮かぶほのぼのとした１句です。進行役のお二人も同様の感想を述べました。ぼくは仕事をしながら半ば聞き流していました。

しかし、毎月数百(あるいはもっと)を下らないであろう投句の中から選者がこの句を取り上げたのにはわけがありました。鈴木氏は「単にほのぼのとするというのではないような気がする。何か大きなできごとが過去にあったのではないか」と言います。そこで、スタジオから作者に電話をかけて話を聞いてみようということになりました(差支えのない人は投句のハガキに自分の電話番号を書いています)。

ラジオからは電話の向こうで必死に嗚咽をこらえる気配が伝わってくるばかりで言葉が出てきません。スタジオはその様子を察してそれ以上深くは聞かず、「よい句をありがとうございました。どうぞお元気で」というような一方通行のあいさつで締めて電話は切られました。

鈴木氏が感じていたように、何があったかは分からないもののよほど重大な出来事が作者あるいは作者夫妻に過去にあり、その局面を奥様の人柄に支えられて乗り越えることができたという含蓄の句でした。

（サポーター）

慧眼(けいがん) とはこういうことか。なぜそのように感じるに至ったのかという説明はなかったように思いますが、おそらく句全体に漂う何かを鈴木氏は感じ、何かしら重大な出来事と妻への深い感謝、愛を読み取ったのでしょう。心を読むとか見透かすといった下世話な話ではありません。

簡素な言葉の並びを手がかりに、句の奥深くにそっと置かれた真意に思いを致してその心を掬い取る。作者の側から言えば、人には言えないことながら(あるいは分かってもらえなくてもいい)なんとか言葉にして亡き妻への想いを形にしたかった。ところがそのわずかな言葉をたどって自分のところまでやって来てきちんと受け止めてくれる人があった、という驚きと喜び。このときの作者の電話口での嗚咽は、亡き妻への情もさることながら「分かってもらえた」という満たされた思いからだった気がします。「救われる」というのはこういうことではないかと思うのです。

洞察、直感、経験・・・。ともかく、鈴木氏の眼力と感受性に触れたとき、山に例えるなら、難しすぎて自分には登れそうにないとても魅力的な山を知ってしまった歯がゆさ、あるいは、あんな山に登れる人もいるのだというジェラシーにも似た思いを抱きました。忖度（そんたく）という、このごろよく聞く言葉を思い浮かべる方もあるかもしれませんが、言うまでもなく全く異質のことです。

自分の思慮のなさ、言葉の軽さを恥じながら書きました。以下は蛇足です。これを書きながら、「分かる」という言葉がとんでもない深い意味を持つのだと思い至りました（６３才にもなって今頃！）。分かる、分かち合う、というときぴったりと寄り添うというニュアンスが本質としてあるような気がします。また、(観音様だったか) 仏の手には水かきのようなひだがあって衆生の苦悩を漏らさず掬い取るのだとか。ことば遊びではなく「掬う」と「救う」はもともと同じところから生まれたのかもしれないとも思います。

2017年度　山行計画

月	日	山　名	締切日
7	9	部子山	6月30日
8	2～3	白山	7月13日
9	9	西穂独標	8月31日
１０	1	烏帽子山	9月20日
１１	1	刀利ダム	10月20日
１２	2～3	納会	
3	２５	猿山灯台	3月15日

入会希望者（体験者・サポーター）をご紹介ください。

問い合わせは事務局まで

不要の切手をお寄せください

皆さんご承知のことと思いますが、赤い靴ひもの会では会報、各案内、総会資料などの発送の際、会員の方にご寄附いただいた切手を使わせていただいています。これらは年額ではかなりの高額で、会の運営上大いに助かっています。これまでにいただいた切手のストックはまだ残っていますが、今後の運営を考えるともう少し余裕があれば安心できます。

そこで、皆さんの引き出しの中で眠っている切手があれば赤い靴ひもの会へご寄附いただければありがたい、というお願いです。運営委員に渡していただいても事務局へ送っていただいてもけっこうです。よろしくお願いします。

寄付、賛助会費を寄せていただいた皆さん
(順不同、敬称略)

白栄隆司　白栄恵子　小澤まゆみ
小笠原清子　塚初枝　谷猪弘志
北村良樹　安川實　橋本外志
米山豊　宮文子　藤本信子

編集後記

多くの会員が、定年を過ぎたこともあり、平日の山行実施もしやすくなりました。おかげで今年は花の南竜が待ってます。

「居心地の良い場所」

高森　美保

名前を見てこの人誰だっけ？と思うほどたまにしか参加できない幽霊部員です。私はこの会が出来る前のがん体験者が白山登山する事業を成人病予防センターが行った第一回目の時にセンターの職員でした。登山経験者、体力に自信がある選ばれし職員がスタッフとして参加し緻密な計画での白山登山。足が前に出なくなった人を徳田さんがおぶって登ったんだ。心配でスタッフは何度も山道を往復。室堂についた時には感動で涙。御来光を見てこれまた涙。下山して食べたスイカの美味しかったこと！と下山後、若い男性職員が興奮して話す様子から大イベントが成功だったことと仕事として参加した以上に心を揺さぶる二日だったことが感じ取れました。しかし、登山をしたことがない私に、いつそのスタッフとしての順番がまわってくるか心配で、出来ることなら参加したくない職員でした。それが十年以上たって、自らこの会に参加しました。がんの検診から診療の検査業務を仕事とし、何かしら行動をしたいと思ったのです。初めての会は少し戸惑いながら挨拶をして、薬箱を持つ係になったり、体験者の方の後方から歩くことで役割を与えられとても嬉しく思いました。なかなか予定が合わずに久しぶりに参加しても、メンバーが次々と「久しぶり。元気だった？」と声をかけてくれます。なんと温かく居心地の良い空間なのでしょう。山行では、状況に応じて瞬時に判断し誘導してくれるスタッフ。自然を満喫しながら、楽しい会話と美味しい漬物を分けてくれるメンバー。♪山男にゃほーれーるなよ♪って言われても山男にも山女にも惚れてしまった私です。

私は昨年、父と母を見送りました。約３年寝たきりだった父を自宅で介護した元気印の母も父の死後しばらくで突然他界しました。明日何があるかわからないと実感した私は毎日を後悔しないよう過ごそうと思ってます。誤解を恐れずに書かせて頂きますが、「癌」という病名を聞いて少なからず「死」を意識し一日の大切さ、平凡な日々が幸福であることを誰よりも重要に感じているみんなだから、とても明るく、包み込む大きな心でこの会が成り立っているのだなあと感じます。また、今度参加した時もよろしくお願いします。

（サポーター）